
鋼の錬金術師～フルメタル・フロンティア～

陽輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の錬金術師〜フルメタル・フロンティア〜

【Nコード】

N7363Z

【作者名】

陽輝

【あらすじ】

この小説は設定や表現やストーリー等々が竜気さんの小説と似た様な所があるかもしれませんが、全て竜気さんに許可を頂いていません。

竜気さんの小説『デジモンフロンティア〜改〜』の鋼錬バージョン『鋼の錬金術師〜フルメタル・フロンティア〜』の始まり始まり。

ちなみに、この小説の主人公はエドで、ヒロインはオリキャラです。後々、この2人は付き合い合わせる予定ですので、この小説ではエドとウィンリイは付き合いません。エドウィンファンの方々すいま

せんが、しつ承下せう。

主な登場人物（前書き）

主人公以外全員オリキャラです。

主な登場人物

エドワード・エルリック

通称：エド

性別：男

スピリット：炎

デジヴァイス：赤 & amp; 黒（途中で同色の新型になる）

性格：基本的な性格は原作通り。だが、何故かトラブルメーカー度が半端なく高くなっている。マジギレすると、背中からドス黒いオーラを出しながら、無表情で静かに怒る。その時のエドは怖いというよりも恐ろしい。

容姿：若干栗色が混ざった金髪のロングヘアに金色の瞳。髪型は三つ編み（時々、ポニーテール）。ウィンリィ特製の機械鎧オートメイルを右腕と左足に装着している。

年齢：15歳（リオールに行く数カ月前）

職業：錬金術師（国家錬金術師）

二つ名：『鋼』

錬金術：ほぼオールマイティー。だが、専門は金属系（錬成陣無し。手パン錬成）

備考：『鋼の錬金術師』の主人公であり、本編の主人公。3年前（当時：12歳）に国家錬金術師の資格を取得した天才少年。ちなみに、ウインリイの事は家族だと思っている為、恋愛感情は全く無い。

フアラル・ガルシエント

性別：男

スピリット：光

デジヴァイス：白&紺（途中で青&黒の新型になる）

性格：基本的な性格はクールな一匹狼。だが、根は優しく面倒見が良い。エドの保護者的な存在（アルと同じ）で、予測できないエドの行動にいつも振り回されているメンバーの苦勞人。マジギレしたエドを止める事が出来る数少ない人物の一人でもある。

容姿：黒髪のロングヘアに黒色の瞳。髪型はポニーテール。美少年で、かなりのイケメン。見た目が格好良い為、女の子にモテモテだが、本人は全く興味が無いらしい。右手には錬成陣の刺青がある。

年齢：15歳

職業：錬金術師（国家錬金術師）

二つ名：『月光』

錬金術：光を錬成する（例：閃光をまき散らす等々）

備考：ファレルの（一卵性の）双子の弟で、エドのストッパー。2年前（当時：13歳）に国家錬金術師の資格を取得した天才少年。

イリス・クリセリア

性別：女（メンバー唯一の紅一点）

スピリット：風

デジヴァイス：紫&pink

性格：基本的に強気で勝気な性格だが、女の子らしい優しさも併せ持つ。最初、エドの事はただの仲間だと思っていたが、窮地を何度もエドに助けられた事で、自分のエドへの気持ちを自覚した。意外と大食漢な一面があり、「秋葉マーケット」でカレー30皿を軽く平らげる事が出来るほど。

容姿：金髪のロングヘアに鳶色の瞳。美少女で、かなりスタイルが良い。両肩には錬成陣の刺青がある。

年齢：15歳

職業：錬金術師（国家錬金術師）

二つ名：『風来ふうらい』

錬金術：風を錬成する（例：竜巻をおこす等々）

備考：本編のヒロイン。2年前（当時：13歳）に国家錬金術師の資格を取得した天才少女。

レギアルト・ファランオ

通称：レギア

性別：男

スピリット：雷

デジヴァイス：青&黄

性格：明るく、ムードメーカーだが、意外と結構冷静。メンバー1の博識者で、様々な知識を持っている（例：機械鎧の構造や整備の仕方等々）。デジタルワールドにいる間だけ、エドの機械鎧の専属機械整備士に。エドに色々と使われる立場（マスタング大佐と同じ）。

容姿：茶髪のショートヘアに焦げ茶色の瞳。まあまあ格好良くて、痩せている。両手には錬成陣の刺青がある。

年齢：16歳

職業：錬金術師（国家錬金術師）

二つ名：『轟雷』

錬金術：雷を錬成する（相手を感電させる等々）

備考：メンバー最年長。2年前（当時：14歳）に国家錬金術師の資格を取得した天才少年。

シヴァ・グレンドラ

性別：男

スピリット：氷

デジヴァイス：水色& a m p ; 緑

性格：甘えん坊で臆病。だが、いざという時の勇気と行動力、それに誰とでも仲良くなれる優しさも持っている少年。エドを「お兄ちゃん」と呼び、懐いているし、憧れている。基本的に他のメンバーも「さん」付けで呼んでいるが、進化している時は呼び捨てで呼ぶ事もある（主にブリザーモンの時）。禁句は“ガキ”で、そう呼ばれる事が一番大っ嫌い。ちなみに、言われたら相手が誰であろうとキレて大暴れする。

容姿：茶色のショートヘアに栗色の瞳。かなり可愛い男の子。右肩には錬成陣の刺青がある。

年齢：13歳

職業：錬金術師（一般）

錬金術：治癒系（メイみたい感じ）

備考：回復役兼マスコットキャラ。メンバー最年少。イーストシテイで両親と共に暮らしている一般の錬金術師。彼の両親は錬金術師で、シヴァ本人の錬金術の腕前もかなりのもの。

ファレル・ガルシエント

性別：男

スピリット：闇

デジヴァイス：黒&灰

性格：思いやりが深く、とても優しい少年。仲間や家族をとても大切にしている。だが、仲間や家族等の自分の大切な人に危害を加えようとする（加えた）者に対しては激しい怒りを示し、時に報復行為に出る。ファラルと同じく、保護者的な立場で、メンバー1の苦勞人である弟をいつも隣でサポートしている。

容姿：黒髪ショートヘアに黒色の瞳。ファラルと似た様な顔立ち。こちらと同じく、女の子にモテモテだが、ファレルは全く気づいていない。左手には錬成陣の刺青がある。

年齢：15歳

職業：錬金術師（国家錬金術師）

二つ名：『闇夜』

錬金術：闇を錬成する（相手の視界を暗くしたり、闇の中に取り込
んだりする事が出来る）

備考：ファラルの（一卵性の）双子の兄で、苦勞人の弟をいつもサ
ポートしている。2年前（当時：13歳）に国家錬金術師の資格を
取得した天才少年。

主な登場人物（後書き）

次から本編に入ります

第1話：始まり（前書き）

第1話です。

第1話：始まり

此処は東部の中心地・イーストシティ。その街に存在する、とある宿屋のとある一室。

その部屋には、若干栗色が混ざった金色の長い髪に金色の瞳で、右腕と左足が機械鎧オートメイルの少年がベッドの上に寝転んでいた。

「……………（怒）」

無言で怒っている少年の名はエドワード・エルリック。15歳。若干12歳で資格を得た史上最年少国家錬金術師で、二つ名は『鋼』の錬金術師。

彼は4年前、弟のアルフォンスと共に最愛の母親を甦らせる為、錬金術の最大の禁忌、人体錬成を行ったが失敗。

その失敗の代償は大きく、エドワードは左足を、アルフォンスは肉体の全てを失った。更にエドワードはアルフォンスの魂を錬成する為に代価として右腕を失ってしまう。

その後、エドワードは失った右腕と左足を機械鎧で補い、国家錬金術師となり、失った手足と弟の身体を取り戻す方法（賢者の石）を求め、アルフォンスと共に旅に出た。

そして、あれから約3年。未だ賢者の石は見つかっていない。

現在、エルリック兄弟はイーストシティに長期滞在していた。勿論、

理由がある。

っていうか、理由が無ければ、エルリック兄弟（特に兄の方）は既にイーストシティを旅立っている筈だ。

そんな旅から旅への根なし草であるエルリック兄弟を長期滞在させるその理由とは…。

「何が『君に紹介したい子達が居るから、しばらくイーストシティに滞在しなさい』だ！しかも、『それから、君達が勝手に旅に出た場合、命令違反という事で軍法会議にかけるからな』って脅しやがって、あの無能大佐????????」

そうエドワードの後見人であるロイ・マスタング大佐の命令だからだ。しかも、脅しつき。

「あのクソ大佐、覚えてろよ!!????早く、賢者の石を見つけてアルの身体を元に戻してやりたいのに……」

エドワードがそう呟いた。その時、エドワードが居る部屋の扉がノックされた。

「はい？」

「エドワード・エルリック様、1階のフロントにお電話が来ております」

「え？電話？誰からだろ……」

と呟きながら、エドワードは1階のフロントに向かった。

エドワードはフロントの電話を取った。

『もしもし?』

『もしもし、エドワードさんですか?』

電話の主の若い女性の様だ。

『確かに、俺がエドワードだけど……。アンタ誰だよ?俺に何か用か?』

この電話主が誰か分からないエドワードは警戒している。

『はじめまして、私はオフアニと申します。突然、エドワードさんにお電話をしたのは折り入って、お頼みしたい事があるからです』

『頼み事?』

『はい。助けて頂きたいのです』

『アンタをか?』

『いえ、違います。確かに私も入っているかもしれませんが、私が助けて頂きたいのは、全く違うものです。エドワードさん、どうか、よろしく願います』

オフアニはかなり切実の様だ。そんな切実なオフアニにエドワードは問いかけた。

『1つだけ、質問して良いか？』

『はい』

『その“助けたいもの”っていうのは、オファニさんにとって滅茶苦茶大切なものなんだな？』

『はい。とても大切なものです。万が一、それが無くなれば、私…いえ…世界中の全ての人が困ります』

『そうか……。で？それを助ける為には俺はどうすれば良いんだ？』

『本当に助けて頂けるのですね？本当にありがとうございます』

そのエドワードの言葉を聞いたオファニは凄く嬉しそうだ。電話越しな為、エドワードにはオファニの表情は全く見えない。だが、声から察するにおそらく凄く嬉しそうに満面の笑みを浮かべているだろう。

『どういたしまして。んで？俺は一体何をすれば良いんだ？』

エドワードが再び促す。

『まず、エドワードさんには此方（私がいる世界）に来て頂きます』

『それって、やっぱり汽車で行くのか？』

『はい。イースト駅の6番線に停車している汽車で来て頂きます』

『え、確かイースト駅って5番線までしか無いんじゃない？……』

エドワードの言う通り、イースト駅には5番線までしか無い。オフ
アニが言うイースト駅の6番線とは一体……。

『ありますよ。現在は使われておりませんが。場所もかなり人気が
無い所があるので、人目を気にせず此方に来れますよ』

自覚無しで結構恐ろしい事を言っているオフアニだった……。

『分かった。何時の汽車に乗るんだ？』

『4時55分発の汽車に乗って下さい。ちなみに、手ぶらで結構で
すよ』

その言葉を聞いて、エドワードはフロントにある時計を見た。現在
の時刻：4時20分。出発時刻まで、後35分。

『分かった。準備してから向かう。だから、切るぞ？』

『あ、ちょっと待って下さい！』

『何だよ？まだ、何かあるのか？』

『切符についてです。6番線に停車している汽車に乗る為には特殊
な切符が必要なのです』

『特殊な切符？そんなのどうやって手に入れるんだよ？』

特殊な切符……つまり、普通の人間には手に入らない切符という事だ。

『イースト駅にいる魔法使いみたいな格好をした人に自分の名前を告げて、彼が持っている赤いカードみたいな物を貰って下さい』

エドワードは内心ビツクリした。いきなり、ハロウィンみたいになったから。でも、エドワードはオフアニを助けると決意した為、それを表面には出さなかった。

『魔法使いみたいな格好をした人だな？分かった。今度こそ、切っても良いよな？』

『はい。それでは後程』

と言って電話が切れた。エドワードは受話器を置いてから、自分の部屋まで全力で走って行く。

エドワードは受話器を置いてから、自分の部屋まで全力で走って行く。

バタバタバタという物凄いエドワードの足音に隣の部屋で本を読んでいたアルフォンスはビツクリして、エドワードの様子を見に行く事にした。

「兄さん、足音五月蠅いよ。皆さんの迷惑になるでしょ？」

兄への文句を言いながら、扉を開けたアルフォンス。エドワードを見て、彼はビツクリした。

「……………兄さん、何で身支度してるの？」

「出かけるからに決まってるだろ。アルフォンス」

平然に答えるエドワード。アルフォンスは部屋の中に入りながら、エドワードの今日の予定を思い出す。

「確か、兄さんは今日出かける予定は無かったよね？」

「ああ。だが、急遽出来たんだ」

「また図書館に行くの？」

アルフォンスは呆れながら言った。ちなみに、図書館とはアルフォンスが作った“兄さんが行きそうな場所ランキング”のNo.1の場所だ。

「いや、違う。人助けだ」

「人助け？兄さんが？凄く珍しいね」

アルフォンスは言った。

「ああ、俺もそう思う。だけど、オファニさん、物凄く困ってたみたいだから……」

「……分かった。詳しい事情は分からないけど、兄さんが助けたいって思ったなら、行ってきて良いよ。後の事は僕に任せて！」

エドワードは身支度を終え、部屋の扉の方へ向かいながら、かなり大まかに事情を話す。

アルフォンスにはエドワードの話は大まか過ぎて、よく分からない。だが、アルフォンスは兄の意思を尊重した。

「…サンキュー、アル？荷物とか頼むな」

アルフォンスに見送られ、エドワードは部屋から出て、宿屋の玄関へ向かって行った。

第1話：始まり（後書き）

エルリック兄弟とオファニと従業員しか出て来ませんでした？勿論、皆さんはオファニの正体は分かりましたよね？

次回、第2話はメインのオリキャラ達（多分、全員）が出て来ます。よろしく願いします？

陽輝

第2話・出会い（前書き）

エドワードとメインオリキャラ達の出会いです。デジモンも出ます。

第2話・出会い

現在の時刻、午後4時35分。エドワードはイースト駅へ到着した。

「えーと…」

エドワードはキョロキョロと辺りを見回すが、中々見つからない。

「くっそー、何処にいるんだよ…」

段々とイラついて来たエドワードが呟いた。その時、

「私なら、此処にいますよ」

と、声がした。しかも、エドワードの背後から。

「！あー、居たあー！！」

エドワードは後ろを振り返り、その人物に指を指しながら叫んだ。

「オフア二様の依頼を引き受けて下さったお方ですね？私の名前は
ウィザーモンと申します。よろしくお願い致します」

と言って、魔法使いみたいな格好をした人…改め…ウィザーモンが
頭を下げた。

ウィザーモン

魔人型。成熟期。必殺技はサンダークラウド。

「俺はエドワード。エドワード・エルリックだ。エドって呼んでくれ。此方こそよろしくな」

「さっそく、本題に入りますが、エドさんはこれを貰う為に私を探していたんですね？」

さっそく本題に入った、ウィザーモンは懐から赤いカードみたいな物を取り出した。

「！！ああ、そうだけど…。それがそうなのか？」

「はい。オフア二様がいらっしやる場所（世界）へ行く為の切符です」

ウィザーモンは赤いカードみたいな物：改め：切符をエドワードに渡す。エドワードはウィザーモンから貰った切符を色々な角度から眺めている。

「それでは、エドさんを6番線乗り場へご案内させていただきます」

「ああ、頼む」

エドワードとウィザーモンは6番線乗り場へ向かった。

現在の時刻、4時50分。

エドワードとウィザーモンは6番線乗り場へ到着した。そこにはエドワードがいつも乗っている汽車が停車している。

「これに乗って下さい」

「分かった。じゃあな、ウィザーモン」

「はい、ご武運をお祈りしております」

エドワードはウィザーモンと別れ、目の前に止まっている汽車に乗り込んだ。

ジリリリリリッ！と発車のベルが辺りに鳴り響いた。その直後、エドワードが乗った汽車はゆっくりと走り出した。

エドワードは周りを見回した。エドワードが乗った車両には彼以外、女子1人、男子4人が乗っている。

「あら、もしかして貴方もオファニさんに？」

金髪のロングヘアに鳶色の瞳を持った美少女がエドワードに話しかけて来た。

「ああ」

エドワードは頷きながら答えた。

「とりあえず、自己紹介、する？」

彼女の提案にエドワードは頷いた。

「ねえねえ、どついつ風にご自己紹介するの？」

茶髪のショートヘアに栗色の瞳を持った一番幼くて可愛い少年が
問いかけた。

「えーと…。名前と年齢と職業…かな？」

その問いに答えたのは、黒髪のショートヘアに黒色の瞳を持った
美少年だ。

「分かったわ。私はイリス・クリセリア。15歳。
職業は国家錬金術師。二つ名は『風来^{ふうらい}』よ。よろしく」

1番、初めに自己紹介したのは、金髪のロングヘアに鳶色の瞳を
持った美少女。

「俺はエドワード・エルリック。エドって呼んでくれ。15歳。職
業は国家錬金術師。二つ名は『鋼』だ。よろしく」

2番目はエドワード。

「俺はファレル・ガルシエント。15歳。職業は国家錬金術師。二
つ名は『闇夜』。よろしく。こっちが……」

3番目は黒髪のショートヘアに黒色の瞳を持った美少年。

「ファラル・ガルシエント。15歳。職業は国家錬金術師。二つ名
は『月光』。ファレルの（一卵性の）双子の弟」

4番目は、ファレルと同じ様な顔立ちをした黒髪のロングヘアに
黒色の瞳の持ったポニーテールの美少年。

「俺はレギアルト・ファランオ。レギアでいい。16歳。職業は国家錬金術師。二つ名は『轟雷』。一番年上だけど、敬語使わなくても良いぞ。以後、よろしく」

5番目は茶髪のショートヘアーに焦げ茶色の瞳を持ったまあまあ格好良い少年。

「僕はシヴァ・グレンドラ。13歳。一般の錬金術師です。よろしくお願いします！」

最後に茶髪のショートヘアーに栗色の瞳を持った一番幼くて可愛い少年。

一気に自己紹介を終えた彼らはしゅんとなった。そして、

「……………ええええええッ!!」「……………」

と叫んだ。

第2話・出会い（後書き）

次はエドワード達がいよいよデジタルワールドに行きます。

第3話・未知なる世界へ（前書き）

エド達が遂にデジタルワールドへ行きます。

第3話：未知なる世界へ

汽車は薄暗いトンネルへ入って行く。その瞬間、車内は薄暗くなっ
た。

「ねえ、シヴァ。貴方は本当に錬金術師なの？」

イリスはシヴァに問いかけた。

「うん！本当だよ！今度、皆に僕の錬金術を見せてあげる！」

シヴァは笑顔で答える。

「……それは楽しみだ（な／ね）」「……」

シヴァ以外のメンバー全員はそう言った。

そして、6人はしばらくの間、錬金術の話で盛り上がっていた。

そんな中、シヴァはエドワードに話掛けた。

「あ、あの！エドさん！」

「ん？どうかしたのか？」

エドワードはシヴァの方に視線を向ける。他のメンバーはエドワ
ードとシヴァが話をしやすいように話を中断する。

何故か、シヴァは恥ずかしそうにしている。

「シヴァ？どうかしたのか？」

エドワードが再び問いかけると、

「あ、あの！エドさんの事“エドお兄ちゃん”って呼んでも良い？」
とシヴァは言った。

「俺は別に良いぜ？1つだけ条件があるけど」

エドワードは条件ありだが、普通にシヴァの願いを受け入れた。

「本当に！？エドさん、条件って何なの？」

シヴァの問いかけにエドワードの答えは…

「条件は“俺の弟と仲良くする事”だ」

エドワードは本当に弟思いの良いお兄ちゃんだ。

「うん、良いよ！それでエドお兄ちゃんの弟さんの事、僕に教えてよ」

シヴァはアルフォンスについて、エドワードに聞くと、エドワードは頷いた。

「名前はアルフォンス・エルリック。通称：アル。14歳。俺と真逆の性格で、喧嘩とか争い事が大っ嫌い。だけど、昔から喧嘩が強くて、俺はあいつに喧嘩や体術の組み手で一度も勝った事が無い」

「勝った事が無いのか。弟に」

横で聞いていたファラルは若干呆れ気味で呟いた。

「うるせー！錬金術の腕は俺の方が上だ！」

その呟きが聞こえたエドワードはファラルに向かって叫んだ。

「ふーん、そうなんだ。所でアル君の錬金術の腕前は？」

ファレルがエドワードに問いかける。

「アルの腕前？国家錬金術師の資格を余裕で取得出来る程だぜ。ちなみに、アルはシヴァと同じ一般の錬金術師だ」

エドワードは自慢気にそう言った。

「クスクス。エドは本当にアル君の事が大切なのね」

イリスが笑いながらそう言った。その時、異変が起きた…。

キュイイイイイツ！

謎の音が車内に響き渡った後、突然6人の目の前が輝き出した。その眩い閃光に6人は目を閉じる。

光がおさまり、目を開けてみると、彼らの目の前には通信機のような物が浮いていた。

「何だこれ？」

エドワードは不思議そうに恐る恐るそれを手に取り、眺める。

次の瞬間、汽車がトンネルを通り抜けた。それがきっかけて、車内に光が差し込んで来た。

「此処…何処？」

彼らは全く見た事が無い光景に啞然としながら窓の向こうを眺めていた。

青空は何処までも続いているが、地面はそうではない。

大地がある所はあるが、無い所は遥か下まで暗闇が続いている。

「い、一体、何が起こったんだよ？」

半ば放心状態で、思わずそう漏らすエドワード。

車線は宙に浮いているというのに、この汽車は平然と走り続けた。

「おいおい、思いつきり非科学的だろ…」

レギアルトがこの状況に驚きながらも、冷静を保とうと心を落ち着ける。

「あ、あれは何かかな？」

ファレルがふと視界に入った物に視線を移し、空を指差した。

そこには白いクラゲの様な変な生き物が翼も無いのに空を飛んでいた。しかも、複数。

それを見たエドワード達は全く全然訳が分からないけど、とりあえずあの変な生き物の正体は合成獣<キメラ>では無いな...と思った。

ポヨモン

スライム型。幼年期1。必殺技は《強力な酸の泡》。

その変な生き物から視線を外したファレルが窓から顔を出して前方を見る。すると陸が見えた。

半円球状の小さな家らしき物も目視出来た為、それなりの文明があるという事を悟るファレル。この汽車はそこへ向かっているようだ。

第3話・未知なる世界へ（後書き）

ケルベロモン戦の前にオリジナルストーリーを入れようかな？って
思っています？

第4話：初戦闘（前書き）

錬金術を使った戦闘シーンがあります。ですが、戦闘シーンを上手く書けるか、はつきり言って自信がありません。ちょっと相手のデジモンが可哀想かも？

雛鳥型。成長期。必殺技は《マジカルファイアー》。

「デ、デジタルモンスター？」

「って何？」

「っていつかしゃべった!？」

ファラルとファレルがピヨモン達に聞き返し、シヴァは鳥が言葉を放した事に驚いてエドワードの後ろに隠れる。

「“デジタルモンスター”略して“デジモン”」

「そして、此処は“デジモン”が住む世界“デジタルワールド”！」

「君達は人間界リアルワールドから来たんだよね？」

口ぐちにそう言ってくる目の前の変な生き物…デジモン。

「私達はピヨモン、よろしくー！」

「よ、よろしく」

シヴァは驚きながらも、エドワードの後ろから懸命にそう返す。

「貴方達はこの世界を救いに来てくれたの？」

「ケルビモンがこの世界を支配しようとしてるんだ！」

「地面が無いのも、“デジコード”を取られたからなんだ！」

ピヨモン達は待った無しで、次々と話していった。

「ちょ、ちょっとストップ!」

混乱しているエドワード達の中で唯一、正気を保っていたレギアルトがピヨモン達を止める。

「と、とりあえずデジコードとやらの説明を…」

レギアルトがピヨモンにデジコードの説明を求めた。その時、遙か遠くから赤くて巨大なクワガタムシがもの凄い勢いで此方に向かって来た。

「ん?なあ、ピヨモン。あれは何だ?」

エドワードが赤くて、巨大なクワガタムシに指を指しながら、これは何かと聞いた。エドワードの指先を見たピヨモン達は悲鳴を上げる。

「あ、あれはクワガーマン!凶悪で凶暴な成熟期デジモンよ!」

クワガーマン

昆虫型。成熟期。必殺技は《シザーアームズ》。

「クワガーマン?あれもデジモンなのか?」

レギアルトがピヨモン達に問いかける。

「そつよー！」

ピヨモン達は若干、叫びながら答えた。

「あれは敵なの？」

今度はイリスが問いかける。

「多分！」

ピヨモン達は先程と同じ様に若干、叫びながら答えた。

「敵なら、手加減は無用だぜー！」

エドワードは滅茶苦茶楽しそうだ。

「あいつ…状況分かってるのか…？」

ファラルは呆れ気味でそう呟いた。

「うるせーよ、ファラル。俺は12歳の時からアルと一緒にアメストリス中を旅をしているんだ。だから、こういう厄介事は慣れてる！！」

ファラルの呟きが聞こえたエドワードはファラルにそう言い返した。

「慣れてるのね…」

イリスが呟いた。その時、クワガーマンがエドワード達に向かって突撃して来た。

「危ない！《マジカルファイアー》！！」

ピヨモンの必殺技がクワガーモンに直撃するが、あまり効いていない。

クワガーモンはエドワード達の真上を通り抜けて行った。

「きゃッ！！」

クワガーモンが通り抜けた時に起こった強風でイリスはバランスを崩し、地面に倒れそうになった。

倒れた時の衝撃を耐える為にイリスは目を瞑る。だが、何故か衝撃が全く来なかった。

「え………？」

その代わりに、イリスは何か暖かいもので支えられている。

目を開けたイリスは自分を支えてくれている暖かいものを見た。暖かいものの正体は…

「エド……？」

エドワードだった。突然の事で呆然としていたイリスにエドワードが心配して声をかけた。

「おーい、イリス。大丈夫か？」

「！え…ええ、大丈夫よ。エド、助けてありがとう…」

イリスは顔を真っ赤にしながら、エドワードにお礼を言った。

「どういたしまして>ニカツ<。イリス、怪我が無くて良かったな！」

「う、うん……」

エドワードはニカツと笑ってそう返した。イリスはエドワードの笑顔を見て、また顔が真っ赤になった。

「お前ら…今はそんな状況じゃないだろ！また、クワガーモンが此方に向かって来ているみたいだぞ！！」

ファラルがエドワードとイリスを若干突っ込みながら注意した。そのファラルの言葉で、エドワードとイリスの表情は真剣なものに戻った。

クワガーモンはメンバーの中で、一番ひ弱そうなシヴァに向かって突撃して来た。

「うわあああああゝ！！」

シヴァは悲鳴をあげて、目を瞑る。

その時、ドカドカドカドカドカツ！という音がした。

「大丈夫か？シヴァ」

シヴァはファラルに声をかけられて、目を開けると…。

自分の近くにいた筈のクワガーマンは何故か遠くの方へ飛ばされていた。

「シヴァ、ファラルが助けてくれたんだよ！」

ファレルがシヴァにクワガーマンから助けたのは誰か教える。

「ファラルさん。助けてくれて、ありがとう？」

「ど、どういたしまして…」

シヴァがお礼を言うと、ファラルは照れながら返事をした。

クワガーマンは再び、彼らへ突撃しようとして試みた。いち早く、それに反応したファラルとファレルがクワガーマンを迎え撃つ。

「行くぞ！ファレル！！」

「分かった！ファラル！！」

ファラルの右手とファレルの左手にある錬成陣が輝き出し、2人は複数の光と闇が混ざった玉を錬成した。

「っいつけー！！」

複数の光と闇が混ざった玉がクワガーマンに向かって放たれる。

クワガーマンは上昇して複数の光と闇が混ざった玉を避ける。だが…

「逃がさないわよ!!」

イリスの両肩の錬成陣が輝き出し、鎌鼬を錬成する。

そして、イリスは上空にいるクワガーモンに向かって鎌鼬を放った。クワガーモンは鎌鼬を避けようとするが、出来ない。

イリスが放った鎌鼬はクワガーモンの全身の固いカラに傷付ける。

「ラスト!!」

そして、イリスが最後に放った特大鎌鼬が大きなハサミをブチイッと切断した。

クワガーモンは切断された体をねじらせながら呻きを上げる。

「ハサミ、取ったわ」

イリスはそう言った。

「うわっ…イリスさん、容赦無いな…」

シヴァは若干引きながら呟いた。

「次は俺かな？」

レギアルトの両手にある錬成陣が輝き出し、雷を錬成した。

「えい!!」

上空から約1000万ボルトの雷がクワガーモンに向かって落とされた。

クワガーモンが雷に感電し、徐々に高度が下がって行く。感電のせいで動きがかなり鈍い。

「よし、来た来た！」

エドワードはパンツ！！と勢いよく両手を合わせ、地面に手を置いた。その瞬間、錬成音と共に黄い光が散り、鋭く大きなトゲが地面から一瞬で錬成された。

「錬成陣無しだと!？」

「流石、最年少国家錬金術師だね……」

ファラルとファレルがそう呟いた。

「いつけー!!！」

クワガーモンの身体にトゲが貫通し、一輪のデジコードが浮かび上がる。

「何だ、これ？」

エドワードが呟いた。その時、

「それは“デジコード”。君達が持っているデジヴァイスでスキヤンをする事が出来るよ」「

いきなり話しかけられた為、6人はビクツとなる。恐る恐る振り向くとそこには…

オレンジ色のロングヘアに紅色の瞳。髪型はポニーテール。膝まである真っ白の服を着た見た目は20代前半の男性(?)が壁に凭れて立っていた。

第4話：初戦闘（後書き）

ちよつとやりすぎたかな？？ちなみに、最後に出てきた人物はオリキャラです。次回、名前が出ます。

第5話：事情説明（前書き）

第5話です。ほぼ事情説明をしています。滅茶苦茶な文章になっていたりすみません？

第5話：事情説明

「えーと…。アンタ、誰？」

エドワードの台詞に男性(?)はエドワード達の方へ歩きながら、笑って答えた。

「初めまして、俺はグレイ。本名では無いが、気軽に呼んでくれ！ちなみに、呼び捨てでも良いぞ！」

グレイはとてもフレンドリーに自己紹介をした。それにつられたエドワード達も順番に自己紹介をしていく。

「俺はエドワード・エルリック。エドって呼んでくれ。国家錬金術師で、二つ名は『鋼』。よろしくな」

最初はエドワード。

「俺はファレル・ガルシエント。国家錬金術師で、二つ名は『闇夜』だよ。よろしくね。で、こっちが…」

2番目はファレル。

「ファラル・ガルシエント。国家錬金術師で、二つ名は『月光』。ファレルの(一卵性の)双子の弟だ。よろしく」

3番目はファラル。

「私はイリス・クリセリア。メンバー唯一の紅一点。国家錬金術師

で、二つ名は『風来』^{ふうらい}よ。よろしく

4番目はイリス。

「僕はシヴァ・グレンドラ。一般の錬金術師です。ちなみに、最年少者です。よろしくお願ひします>ペ<」

5番目はシヴァ。

「俺はレギアルト・ファランオ。レギアって呼んでくれ。国家錬金術師で、二つ名は『轟雷』。ちなみに、最年長者。よろしく」

最後にレギアルトが自己紹介した。

「此方こそ、よろしくな！エド、ファレル、ファラル、イリス、シヴァ、レギア！」

グレイは笑ってエドワード達と握手していった。

「なあ、“デジコード”って何だ？」

エドワードがもつともな疑問を投げ掛ける。グレイはその疑問に答えた。

「このデジタルワールドにあるものは何でもデータに変えるんだ。そのデータを“デジコード”って呼ぶ」

ピヨモン達がグレイの説明を補足する。

「デジモンとか、海とか、山とか、地面とかもぜんぶ、デジコードで出来ているんだよ！」

「そのデジコードを取られたから、海だったそこが消えたんだ」

ピヨモン達は説明しながら、地面が無い場所を示す。

「そう。で、そのデジコードを取っているのが、ケルビモンって奴なのね？」

イリスは内容を確認する為にピヨモン達に問いかけた。

「えっと…正確に言えば、ケルビモンに心を悪に染められたデジモン達だよ」

とピヨモン達が答える。

「そっちの事情は大体、分かった。んで、俺達にどうしろと？」

エドワードが半分呆れながら聞く。

確かに、突然“オフアニ”って知らない人から電話が来て、赤い特殊な切符で汽車に乗って、変な生き物に会って、この世界を救ってくれと言われたのだ。

あまりの非科学的過ぎて、自分の夢か何かに思えてきそうだった。

エドワードは試しに頬をつねってみたが、普通に痛かった。つまり、痛みを感じる＝これは夢では無いと言う事だ。

「“スピリット”を手に入れて！」

「人間ならスピリットを使えるかも！」

「スピリット？」

ピヨモン達の聞いた事の無い単語に、レギアルトは眉間にしわを寄せた。

「そう、スピリット。この辺りに1個あるって聞いたことあるよ！」

「ちょっと待って！そのスピリットって何個あるの？」

1個ある、という言葉に驚いたファレルは慌てて、ピヨモン達に確認を取る。

「えっと…分かんない。複数ある筈なんだけど…」

「おいおい…」

あまりに適当な返答に、ファラルは思わず呆れてしまう。

「よく分からないけど、私達はスピリットを手に入れれば良いのよね？此処で留まっている訳にもいかないし、とりあえず、駅の外へ出ない？」

イリスは適度に区切りを付けて、駅の外へ向かおとするが、それをグレイが止める。

「なあ、クワガーマンのデジコードをスキャンしなくても良いのか

「？」

そう、 그레이の言う通りだ。クワガーモンのデジコードは未だスキャンされて居ない。

「……………あゝ…忘れてた……………」

エドワード達はクワガーモンの存在を忘れていた様だ。

「エド、やってみるか？」

그레이がエドワードに聞いた。エドワードは躊躇いながらも頷いた。他のメンバーはその様子を見ている。

「で、どうやってやるんだ？」

「まず、ズボンのポケットの中にある通信機のような物…デジヴァイスを取り出す」

エドワードは 그레이の言う通り、ズボンのポケットからデジヴァイスを取り出した。

「デジヴァイスを右手で持って、此処を押す。そのままデジコードにこの部分を当てて、デジコードをスキャンをする。分かったか？」

「ああ、試しにやってみる」

エドワードはクワガーモンの元へ行った。

「スキャンをする前にと！」

両手を合わせ、地面に手を置いた。その瞬間、錬成音と共に黄い光が散り、クワガーモンを貫いたトゲが下から徐々に地面に戻って行く。

そして、トゲは完全に地面の中へ戻り、クワガーモンは地面の上に横たわっている。

「よーし！」

エドワードはポケットから再びデジヴァイスを取り出し、右手に持つ。

そして、そのままクワガーモンのデジコードをデジヴァイスでスキャンした。

そして、クワガーモンは卵…デジタマとなり、空へ昇って行った。

「あの卵は？」

「あれはデジタマだ。デジモンの卵」

シヴァが空に昇って行く卵を指を指しながら問いかけた。その問いに 그레이が答える。

「……………へえ……………」

とエドワード以外のメンバー達が答えた。

「おーい、スキャン終わったぞ！」

叫びながらやって来たエドワードと合流する。とりあえず、イリスの提案で、一同は駅の外へ向かった。

数分後、ピヨモン達や 그레이 に大まかな事情を聞いた一同は駅の外に居た。

「 그레이 さん も ピヨモン 達 も 説明 あり が と ね 」

シヴァが 그레이 と ピヨモン 達 に 礼 を 言 う 。 そ し て 、 エドワード 達 は 出 発 し 、 グレイ や ピヨモン 達 と 別 れ よ う と す る 。 だ が 、 そ の 時 …

ゴオオオオ…！ と 駅 を 囲 む 森 の 西 側 か ら 、 火 の 手 が 上 が っ た 。 緑 色 の 炎 だ 。

「 な 、 何 だ ！ ？ 」

「 森 が … ！ 」

エドワード 達 は そ の 光 景 に 驚 愕 す る 。 そ ん な エドワード 達 の 前 に 燃 え 上 が る 緑 の 炎 か ら 、 3 つ の 顔 を も つ 黒 狼 が 現 れ た 。

第5話：事情説明（後書き）

第6話ではやっとエドがアグニモンへ進化します。ある意味歴史的な場面です。

次も頑張ります!?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7363z/>

鋼の錬金術師～フルメタル・フロンティア～

2012年1月2日11時50分発行